



## 塾名命名と三田山上移転に至るまで (慶應義塾の近代私学へ向けての歩み)

### 【はじめに 福澤塾初期のすがた】

初めに、富田正文著「考証福澤諭吉」から、「福澤塾初期のすがた」についてご紹介します。諭吉は文久三（1863）年秋に築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内の五軒続きの長屋一棟全部を藩から貸し与えられ、蘭学の家塾を開きました。藩中の子弟が三人五人ずつ学びに来るようになり、・・・安政五年より文久二年終に至る迄四ヶ年餘の間は、生徒の就学する者新陳出入して常に数十名に過ぎず。僅かに一小家塾にして、事の記す可きものもなく且塾の記録さへ詳ならざれば、一切の紀事は文久三年正月より起て明治十五（1882）年十二月に終るものとす、という状況でした。明治十六（1883）年に諭吉がみずからしたためた「慶應義塾記事」の「履歴之事」には「本塾は安政五（1858）年の冬、江戸築地鉄砲洲旧奥平藩邸内に設立したるを始として、明治十六年に至るまで正に二十五年なりと、書かれています。

諭吉としては最初から三、四年ほどの腰掛けのつもりであったから、入門帳も作らず、塾名をもつけなかった。屋敷内では「蘭学所」と呼んでいたらしく、女子供が遊戯の際に「蘭学所は怖ひ、蘭学所は怖ひ、大坊主小坊主化けて出る」と謳いはやしたという。当時の蘭学書生には医家の子弟が多く、彼らはおおむね剃髪して僧形であるから、「大坊主小坊主」のことばで形容されたのであろうが、それと共に紅毛駄舌（げきぜつ）のことばをあやつる得体の知れぬ書生たちに対する不気味な感じを含んでいたのであろう。（中略）諭吉は大阪の緒方塾に居たとき、自分たちの学力がそのときの日本において最上の点に達していたことについて、深い自信を持っていた。「江戸にいた書生が折節大阪に来て学ぶ者はあったけれども、大阪からわざわざ江戸に学びに行くというものはない。（中略）ところが、その自信が根こそぎ消し飛んでしまうような事態に直面することになった。それは諭吉がある日、新たに開けたばかりの神奈川の開港場すなわち今の横浜の港を見物に行き、外国人に直接してみ、はじめて自分が数年来死にもものぐるいになって勉強したオランダ語が、実地の役に立たないことを発見したときであった。外国人の開いている店の看板も読めなければ、商品の貼り紙の文字もわからない。・・・ここで英学に転ずる決意をし、独学で英語を勉強し、以後、三度の洋行体験を重ねました。二度目の米国行き＝三度目の洋行体験（1867年）で、洋書の教科書を大量に買って帰ってきました。また、元治元年には自ら郷里中津に出向き、多くの優秀な中津藩士を選び、福澤塾に迎えました。（今回は、この辺から徐々に本題に入っていきます）。諭吉の三度の洋行体験後、福澤塾の姿も大きく変わっていきます。

### 【明治初年の福澤塾の姿】

諭吉は、1867年第2回アメリカ行きの際、米国で大量の洋書を購入して持ち帰り、洋学塾の先生や生徒が洋書の教科書を自由に使えるようにして、教授法を一変させました（コピー機のない時代、各人に回して写すのは時間ばかり掛りました）。また、自身の著作『西洋事情』がベスト・セラーになったことあり、著述家としての諭吉の知名度を引き上げただけで

なく、福澤塾の財政基盤の充実に貢献しました。西洋事情の出版は、偽版や類版等の発行という深刻な弊害も招きましたが、日本国内の人々に与えた文化的ショックは計り知れないものがありました。

慶応4（1868）年4月、諭吉は、国内騒乱が続く中、芝新銭新校地を手に入れ、百名収容の塾舎を建設、鉄砲洲より移転しました。移転してきた時の年号にちなみ「慶應義塾」と命名、（慶應4年の年は9月に明治に改元）。同時に、三度の洋行体験で学んだ知識を生かし、「組織」を西洋の共立学校の制度にならい、家塾から脱して同志の結社たる「近代私学」として発足しました。

1868年「慶應義塾之記」を発表、広く社会の人々に対し、新しい学問の宣告書を示しました。「義塾」という名称は、それまでには他の塾で殆ど見られない特殊な名称でした。一般の子弟（子女）を平等に教育することを目的に義援金によって設立された塾や学校が、義塾と呼ばれる学校で、義という字は「社会公共のため」という意味や協力して事を行う」という意味を持ち、貧民のために無料で設ける施設という意味で義塾とか義田とかいう中国語もあり、「力を寄せ合ってする共同の仕事」を義役といい、「力を寄せ合って建てる結社」を義社と称する例もあったそうです。そんな「義塾」の呼び方が受けることは、諭吉自身にとっても予想外のことだったのではなかったでしょうか。「蘭学所」と呼ばれているだけでは、それほど多くの人々の関心を惹きつけることはできませんでした。当時の世の中も、今と変わらず意外なことが受けたりすることがあったのでしょう。「考証福澤諭吉」には、「この塾は、福澤諭吉個人の私塾ではなく、志を同じくする新しい学問の使徒が、力を協（あわ）せて社会公共のために維持経営する学塾というほどの意味を含ませたものであろう、とにかく従来はほとんど見られなかった義塾という名称が、慶應義塾ひとたび出るや、全国到る処に××義塾の名を冠した学塾が無数にそう出した」と、書かれていました。

「慶應義塾之記」は、「今爰（ここ）に会社を立て義塾を創め、同志諸子相共に講究切磋し、以て洋学に従事するや、事本（も）と私にあらず、広く之を世に公にし、士民を問はず苟（いやしく）も志あるものをして来学せしめんを欲するなり。抑（そもそ）も洋学の由で興りし其始を尋るに、昔享保の頃、長崎の訳官某等、和蘭（オランダ）通詞の便を計り、某国の書を読習はんことを訴へしが、速に允可を賜りぬ」という書き出しで始まります。塾舎もでき、中津藩の羈絆（きはん）を離れて独立の塾を開くについては、何か適当な塾名をつけようということになり、時の年号に因んで慶應義塾と名のことになりました。わが国における新しい学問の宣言書と見るべきものであろうと、「考証福澤諭吉」では締めくくられていました。

### 【幕府の崩壊】

その少し前の話になりますが、諭吉が芝新銭座の有馬屋敷を手に入れて普請を始めようとしている最中、戦乱の中でとんでもないことをしていると周囲の反対も多くありました。京都では鳥羽伏見の戦が起こり、将軍慶喜が江戸へのがれ、これを追って征討軍が東海道を進撃するという事態となり、時局は大きな音を立てて急転回を始めた。人の心を読むことも大変ですが、時代の流れ・世の中の動きを掴むことはもっと困難なことです。文明諸国を直に

見てきた諭吉にとっても大変なことだったと思いますが、諭吉の「時代の先を読む力」は抜群でした。諭吉は自分が勤務する翻訳係の仕事などはもう用がなくなっていたが、時勢の変転を見る必要があるから毎日城中へは顔を出していると満城酔えるがごとく狂えるがごとく、規律もなく礼節も忘れて、乱脈至極の様相を呈してきた。諭吉は冷静な傍観者の眼で、その有様を観察していた。加藤浩之（加藤は但馬国出石藩＝兵庫県の藩士。のちに幕臣。わが国におけるドイツ学の創始者で、維新後政府の諸官職を歴任し帝国大学総長、枢密顧問官となる）が袴を着用して、将軍に拝謁を願うと云って控え室でりきんでいるのを見付け、君に聞いたらわかると思うが、どうだ、このところは戦争になるだろうかと尋ねると、加藤は、それを聞いてどうすると言う。どうするたってしれたことだ、いよいよ戦争になるときまれば、僕は荷物をこしらえて逃げなくてはならぬ、和戦如何は僕にとっては重大事だなどと放言して、加藤をプリプリおこらせたこともあったそうです。福澤先生の、幕府の高級官僚に正面から切り込んで、重大事を聞き出そうとした勇氣はただ者ではまねできなかったと思います。諭吉をして、このような漫語放言をほしいままにさせたほどに、江戸城中の空気はだらけきっていたこともある、と書かれていましたが、諭吉の慶應義塾に対する愛情の深さも感じられます。諭吉は開成所奉行支配調役次席翻訳御用」という職名になっていたが、「木村撰津守喜毅日記」の2日あとの六月十日には、夕刻諭吉が来訪して、新政府に御用があるから早々上洛するようにと総督府から命令されたと、語った旨が記されているそうです。諭吉は一も二もなく病気で出られませぬと断ったそうです。八月中旬願いの通り御暇相済、自由の身に相成申候と書かれているそうです。

#### 【結びに代えて 大学部の創設の頃】

明治に入り、世の中も慶應義塾も落ち着いてきて、明治十九（1886）年三月には帝国大学令が公布され、東京大学が法・文・理・医・工の各分科大学よりなる帝国大学に改組されました（幕府は崩壊しても、帝国大学は、それとは関係無く、横道からどんどん進んで行ってしまいます）。このことは、福澤先生にとっても大きな関心事であり、同年11月11日付で米国留学中の長男一太郎に送った書簡には「近来は塾生も至て多く、和田の子供を合して五百九十余名、毎日入社の人存之、英語はますます盛んに相成、唯この上は資本金さへあれば大学校に致度と教員は申居候」と書かれていました（「慶應義塾豆百科」参照）。

義塾は、1872年元塾生、高等教育機関としての整備にも山田資美君の献身的な協力により多額の寄付を受け、国中がお雇い外国人騒ぎをしている中で、アメリカ人教師カロザスが採用できました。また、朝鮮留学生の受け入れを開始するなどして、国際交流も活発にしていきました。

1872（明治5）年、慶應義塾は念願の三田山上に移転も完了し、在學生三百二十三名、東京府下私塾中最大の規模を誇るほどになりました。芝新銭座から三田へ移転した際、この年5月に東京府戸籍調所へ「私学開業願」（「添付資料1」参照）も提出しました。でも、大学部の創設にはまだ至っていません（願書の表紙には「私学開業願」と書かれており、現在も先方で保存されているそうです）

さて、帝国大学の大学部創設の頃の話に戻りますが、その頃、義塾も大学部創設には取り

組みたいという願望を持っていました。明治20年という年は、義塾も、組織面では、総長に小泉信吉、会計建築長に浜野定四郎、教場長に門野幾之進と陣容が整い、施設面でも中村道太の一万円の寄付によりレンガ講堂が完成し、塾内の大勢も帝国大学の後を追いかけて、動き始めていました。でも、予想外の苦難も横たわっており、途中「大学部存廃論」にまで発展するようになりました。

次回で、私の投稿も最後になりますので、この辺で締めなければなりません。それでは次回にご期待下さい。先日、たまたま福澤諭吉協会の機関誌「福澤手帳」(2015年12月号)に「福澤諭吉と徳川家康」という研究論文が掲載されていたので、今回はこれについて紹介させていただきます。ちょうど、東京大学が大学部を創設しようとしていた頃、明治22(1889)年は、天正18(1590)年に徳川家康が江戸入りしてからちょうど三百年に当たり、いろいろ諭吉と家康との間には奇縁もありそうですので、「諭吉と家康の奇縁」やエピソード等についても触れたいと思っています。私は御大将家康についての知識はゼロですが、「家康は戦国時代に区切りをつけ、三百年もの長い間、日本の平和と文化を守った人、諭吉は日本の文明開化と独立を守った人」と考えている程度ですが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。家康が日本の紙幣に登場することはないと思いますが、それだけの価値のある偉人であったという気持は否めません。

(原稿担当 石川 武、編集・イラスト担当  
横山敏雄、金子秀敏)

私塾開業願

しじゆくかいぎようねがい

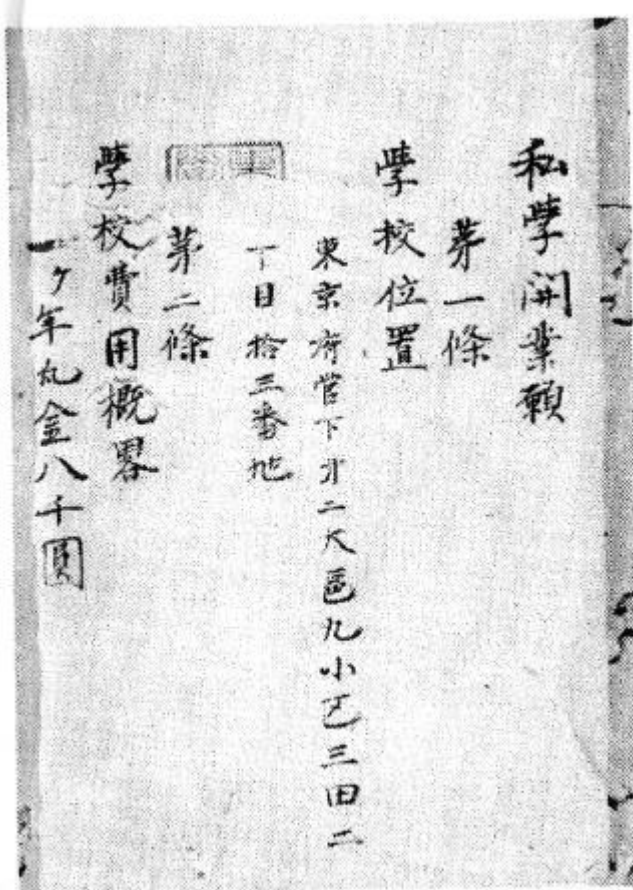
芝新銭座から三田へ塾を移転した際、明治四(一八七二)年五月に東京府戸籍調所へ提出した願書。表紙には「洋学私塾開業願」とあるが、移転届けである。差出人は「芝金杉川口町廿式番借地 福沢諭吉」。本文中に書かれている福沢の身分は町人であり、東京府による許可の付箋が貼られている。

ほかに明治初期に改めて提出することになった、いわゆる「学校開設」にかかわる書類としては、学制頒布後の五年一月に東京府に提出した私学明細表、六年四月に提出した私学慶応義塾開業願、同六月の私立学校明細調などがある。私学明細表には担当科目や略歴が付された教職員の一覧と、学校の位置や在学人数が書かれ、私学慶応義塾開業願には加えて学則類や学年別カリキュラム、教職員の服務規程などが、私立学校明細調には教職員ならびに生徒数、日課表が記載さ

れている。いずれの資料でもほとんどの教職員は士族身分だが、福沢は「商」となっている。  
〔西澤直子〕


▼三田移転

文献「洋学私塾開業願」(マイクロフィルム版「福沢関係文書」)。



●私学慶応義塾開業願(明治六年)

## 赤べこについて

ゆらゆらゆれる首に愛らしい顔立ち。赤べこは（張子） 会津の民芸品の代表です。今から400約年前、会津のお殿様 がもうらじさと だった蒲生氏郷が職人を呼び寄せ作ったのが始まりといわれます。この赤べこを、近くに置いておくと病気（びょうき）や災難（さいなん）から逃れられる、などの言い伝えがあります。

やないづまち えんぞうじ 柳津町の圓蔵寺には赤牛伝説（\*下の「赤べこ伝説」を読んでね）のモデルとなった牛の石像が残されています。

今では色々な赤べこのアイテムが作られ厄よけのお守りとして大人気です。首が「ゆらゆら動く」という面白い特徴（とくちょう）もあり外国の方々にも人気です。

## 赤べこ伝説



会津をはじめ、東北地方では「牛」のことを「べこ」とよびます。今から約600年前、やないづこくぞうもん えんぞうじ 柳津虚空蔵尊「圓蔵寺」というお寺を造るとき、工事が進まず、こまっていたところ、どこからともなく赤い牛があらわれ、一生懸命（いっしょうけんめい）働いて工

事を助け、やっと完成したと言われています。このようなことから、「幸せを運ぶ牛」「幸運の牛」として多くの人に愛されるようになりました。

（福島県河沼郡柳津町）

## 終息へ 願い込め



新型コロナウイルスの感染拡大を受け、福島・会津地方の代表的な民芸品「赤べこ」を、感染防止のシンボルとして活用する動きが広がっている。近くに置くと疫病から逃れられるとの言い伝えがあり、市役所前では特大の赤べこを展示。地元の神社は特製の護符をネット上で配っている。

福島県会津若松市の市役所正面玄関には、22日から布製マスクをつけた全長約165センチの赤べこが置かれている。普段は県外のイベントなどで使うが、コロナの影響で相次ぎ中止。倉庫で眠っていた。

東北地方では、方言で牛を「べこ」と呼ぶ。市史によると、かつて悪性の<sup>ほうそう</sup>疱瘡（天然痘）が流行した際、病気の子どもに赤べこを贈ったと

ころ、たちまち治ったという話が伝わる。強い呪術力がある赤色は悪い病気を退散させることができ、赤べこの体にある黒い斑点は天然痘の痕を表しているとも言われる。市の担当者は「コロナの早期終息を祈願し、感染予防の啓発にもつなげたい」と話す。

猪苗代町の土津神社では、赤べこのイラスト入りの護符を作った。神社で配れば皆が殺到し、「3密」が生じる恐れもあるため、ツイッター上で無料でダウンロードできるようにしたところ、2万回以上もリツイートされている。

禰宜<sup>ねぎ</sup>の宮沢重嗣さん(35)もスマートフォンの待ち受け画を「赤べこ」の護符に変えた。宮沢さんは「いまは辛抱の時。ただ、辛抱するにも勇気を与えてくれたり、不安を和らげてくれたりする象徴となるものが必要。赤べこがその一つになればいい」と話している。

（上田真仁）